ラフカディオ・ハーンの社会進化論的家族国家観 -Glimpses of Unfamiliar Japanの日本表象における「母」「父」「虫」-

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 明治大学大学院
	公開日: 2017-10-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 鬼山, 曉生
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19021

文学研究論集
第46号　2017. 2

ラフカディオ・ハーンの社会進化論的家族国家観
――*Glimpses of Unfamiliar Japan* の日本表象における「母」「父」「虫」――

Lafcadio Hearn's Social Darwinist View on the Family State:
Maternal, Paternal, and Insectean Japan in his *Glimpses of Unfamiliar Japan*

博士後期課程　英文学専攻　2016年度入学
鬼　山　暁　生
ONIYAMA Akeo

【論文要旨】

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の紀行文『知られぬ日本の面影（*Glimpses of Unfamiliar Japan*）』（1894）は日本を肯定的に描くが，同時期の書簡には西洋賛美や日本嫌悪もある。ハーンが愛した幸福な日本とは，思索よりも血筋や本能に基づく神話的家族国家であり，本稿ではその母性・父性・生物性に注目し検討する。

『面影』の日本は，女性性およびハーンの《母国》ギリシャの神話との類似性が強調され，彼にとっての母権／母国の代替と読める。しかし同時に，日本には神道・仏教の文脈で父権も見出される。父なる天皇を戴く日本は，侍の軍事国家であり，かつ日本人は，宗教的父権である仏性をも備える。その天皇もまた，女王蜂／蟻に喩えられる両義的存在で，日本人の無意識的／非思考的忠誠は，昆虫の本能のような進化の結果である。これについてのハーンの論拠は，生物から宇宙までをも統一的に認識する，スペンサーの社会進化論という《科学》にある。

以上を踏まえると，『面影』はまず日本について神話的な母権を土台に置き，そこに軍事的・近代的父権や本能的結束力をも加えて補強している。そこには指導者たる《虫の女王》／天皇の下で，民衆は葛藤もなく本能に従うという強固な家制度がある。

【キーワード】 母胎回帰，父権国家，神仏，家族国家，社会進化論

論文受付日　2016年９月23日　　大学院研究論集委員会承認日　2016年10月31日

1. はじめに

1894年９月29日，ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は，日本を題材とした紀行文『知られぬ日本の面影（*Glimpses of Unfamiliar Japan*）』（以下『面影』）を出版した。『面影』はハーンの執筆の傾向が論じられる際に参照される作品の一つで，その多義性が考察されている。例えば三成（2016）の論では，ハーンは『面影』で日本の前近代的な風景や気質を肯定的に収集しているが，そこには同時に，西洋的偏見の影響も見られるという（151）。小泉（2000）によると，民俗学においてハーンの著作の中でも第一に注目されたのが『面影』であり（24），彼の一連の著作は日本の精神生活に「一体化」した深い洞察として評価できる反面，客観的な日本研究の障害ともなったと指摘されている（212）。本稿では『面影』の写実性よりも，こうした幻想性や矛盾を細部から検討する。

『面影』を執筆していた頃のハーンが，西洋に対して矛盾した感情を持っていたことは書簡から伺える。『面影』の出版と同年の７月20日，ハーンは B. H. チェンバレンに宛てた書簡で，W. B. メイソンとの友情によって執筆活動ができなくなりそうだと述べている。書簡によればメイソンがハーンを招いた夕食は，「決して忘れられない夜の一つ」（One of those evenings that never die）として思い出になったというが，そうした喜びの経験をそのまま受け入れるには躊躇いがあったらしく，次のように続けている。

> But I fear all these experiences will demoralize me. After rescue, a castaway enjoys too much the food offered; a physician stands by to prevent him eating enough. My ghostly part was really too hungry for such experience […]. I ought now to meet some horribly disagreeable foreigners, — so as to have my pleasure checked a little. Besides, I am much too happy to write essays and sketches.（Hearn and Bisland 1910: 350）
> しかしこういう経験をしてしまうと，自分が堕落してしまうのではないかとも思うのです。救助された後，漂流者は差し出された食べ物に耽りすぎてしまう。そこで漂流者がいっぱいに食べないように内科医が待機しているのです。私の霊的部分はそうした経験にあまりにも飢えていました（…）。今は誰かしらひどく不愉快な外国人たちに会わねばなりません――私の喜びを少々抑制するために。しかも，私は幸せすぎて，随筆や小品を書く気になれないのです[1]。

ここでは，西洋人であるメイソンによって喚起された幸福な感情が，ハーンの執筆活動を妨げるものと位置づけられている。ここで注目すべきは「外国人（foreigners）」という文句であろう。ここでの「外国人」とは西洋人を指している。何故ならハーンは『面影』で，日本とそこで見聞きし

[1] 本稿中の日本語訳は，すべて鬼山による。

た人々や事柄を賛美し，西洋人が手本にすべき存在だと見なしているため，不愉快な日本人に会うことは彼の執筆の助けにならないと考えられるからである。対照的に書簡では，喜ばしい西洋人に出会ったことを認めており，そして執筆を続けるには「誰かしらひどく不愉快な外国人たち」（some horribly disagreeable foreigners）に会わねばならないとしているのだ。まるでハーンの執筆は，西洋人とは自らを不幸にする存在であるという認識に基づいているかのようである。

この日付より5日前，同じくチェンバレンに宛てた書簡で，とあるイギリス人が新しく友人になったことをハーンは知らせている。そこでは，彼が西洋の偉大さにあらためて気づかされた時の衝撃が記されている。

> A sudden sense of the meaning of that civilization I had been so long decrying and arguing against, and vainly rebelling against, came upon me crushingly. […] How small suddenly my little Japan became! — how lonesome! What a joy to feel the West! What a great thing is the West! What new appreciations of it are born of isolation! What a horrible place the school! (341)
>
> 突然，私があれほど長く非難・糾弾し，のみならず虚しく抵抗さえしてきた西洋文明の意味が痛烈に感じられました。（…）私の小さな日本はなんて突然にちっぽけとなったのだろう！――なんと［この地は］辺鄙であることか！　西洋を感じるのは何という喜びか！　西洋とは何と大いなるものか！　孤独から，何という新しい西洋評価が生まれてしまうことか！　この学校が，いかにひどい場所か！

ハーンは自分が西洋と文明といったものに抗い続けてきたことを無為とし，偉大で喜ばしい西洋と，小さな辺境国である日本とを対比しているのである。

こうした《近代西洋への誘惑》とでもよべる感情に対し，続く箇所でハーンは思考停止によって対処しようとする。

> Then I stopped thinking. For I saw my home, and the lights of its household Gods, and my boy reaching out his little hands to me, and all the simple charm and love of old Japan. And the fairy-world seized my soul again, very softly and sweetly, as a child might catch a butterfly. (341)
>
> そうして私は考えるのを止めました。目にしたのは我が家と，屋敷神の光と，小さな手を私へ差しのべている息子と，古き日本のあらゆる単純な魅力と愛でした。そして，とても穏やかに甘やかに，子供が蝶を捕まえるように，妖精郷が再び私の魂を捉えました。

この思考停止を支えるのは，幻想化された日本像だ。家を守る神々（屋敷神）と息子の一雄を見出

し，そこから「古き日本（old Japan）」ないし「妖精郷（fairy-world）」の魅力や愛が自分を優美に捉えたといった旨を述べている。なお，「蝶（butterfly）」は妖精の暗示と思われる一方で，「魂（soul）」に喩えられていることと，ハーンのギリシャ趣味を鑑みれば，ギリシャ神話のプシュケーかもしれない。いずれにせよハーンにとっては，考えることが神話宗教的幸福の妨げなのである。多神教的母国――ギリシャ――によってハーンの家庭像/家制度像に非一神教的な心霊観念が反映され，それが彼の近代西洋文明に対する葛藤への慰撫になったことは推察できるが，ここでは思考と対立されるハーンの幸福感が，独特な親子関係と「虫」の表象によって表現されている点に注目したい。本稿では，家制度に関連する『面影』の描写を「母」，「父」，そして「虫」といった要素に注目して確認していく。

2.　母国としてのギリシャまたは日本

ハーン像の重要な要素として指摘される一つに，母的な女性性がある。平川（1998）によれば，ハーンの「夏の日の夢（The Dream of a Summer Day）」（1895）において，ギリシャでの母との思い出は魔法的世界にあり，母は神々しく記されている（16）。また同論は，聖母子の描かれたギリシャのイコンを見たハーンが，絵の中の子供を自分自身だと思っていたという逸話を挙げ，これを「甘え」の構造に基づく母子関係と見なし，「日本で，ハーンは幼年時の母子関係に似た安らぎをふたたび見出した」と推測する（18）。日本時代のハーン像は，母子一体的な，母に受容されている「子」だというのである。この幻想的「安らぎ」によってハーンは，自らの西洋に対する憎悪と憧憬を癒やそうとしたとも言えよう。また，彼の記した日本が，《強大な父親》としての西洋と対照される《抑圧された母親》とみなしうることに関しては，関田（1995）が論じている。それによれば，ハーンは母を捨てたアイルランド人の父への反感を強く抱いていた。それが理由で，アイルランドの守護聖人パトリシオに由来する「パトリック」の名を捨てたほどだった。父に対するハーンの心理的許容は，晩年である1903-04年に残された草稿まで待たねばならないと関田はいう。そこでは，幼い頃の父との「よき思い出」だけが記されているからだ（201）。この点に注目した関田は，そこに至るまでの道筋に，ハーンが抱いていた「『父権』や『近代』に象徴される『力あるもの』への嫌悪」を見出している。それを強調したのが「父権的な西洋，母権的な東洋」の図式だったというのである（214）。こうした論をふまえて，『面影』を検討していく。

ハーンが幼少期に母と過ごした故郷ギリシャ，そしてその文化は，『面影』の各所で日本になぞらえられている。例えば，日本の様々な信仰については，その「多数がその空想の美しさにおいてあのギリシャ神話にさえ匹敵する（a large number are comparable for beauty of fancy even to those Greek myths）」（Hearn 1894 1: viii，下線部強調鬼山，以下同様）とされている。ここで注目すべきは，日本とギリシャの類似点を指摘するハーンの眼差しが，同時に日本の女性性にも向けられているという点だ。「常民は（…）月のことを『お月さん』と称するが，これは古代ギリシャの田園詩人達による用法と同様，女性としての月のことだ（the common people［…］address the

moon as O-Tsuki-San, or ‘‘Lady Moon’’, just as the old Greek idylists did)」(171) とあるように，民衆による月の女性的擬人化にギリシャ詩的意味を彼は見出している。日本の人々や霊的存在は，ギリシャ神話の様々な乙女姿の精霊（ニュンペー）と同一視される。例えば宿の給仕の女性について「(古代ギリシャの) 水の精ナーイアスのような胸をしている (with a bosom like a Naiad)」と述べ (225)，京都の侍の庭に育った柳の木が女性に化けて侍の子を産んだ伝説については，「古代ギリシャの木の精ドリュアドの夢 (the old Greek dream of dryads)」を想起させるという (Hearn 1894 2: 166)。仏教についてハーンに教えた男子学生アキラが，「若い日本の少女」(a young Japanese girl) にも見えるという指摘 (Hearn 1894 1: 35) からも，ハーンが日本に女性性を見出そうとしていることが察せられる。

ここでハーンが日本に見出している女性性とは，強力な父権性の下で抑圧されている特性であることは，見逃せない。例えば演劇については，出雲の阿国に歌舞伎のはじまりを見いだせるにもかかわらず，その後女性は演劇から「古代ギリシャ人達におけるように (as among the old Greeks)」締め出されてきた (250) と指摘する。橋を渡る民衆の足はみな「小さく，左右対称だ――その軽やかさは，ギリシャの壺に描かれた姿の足のよう (small, symmetrical, — light as the feet of figures painted on Greek vases)」である (145)。また，日本人が常に微笑している理由は，道徳だけでなく，「ギリシャ芸術において苦悶の表現を規制した (regulated the expression of suffering in Greek art)」美意識も関わっている (Hearn 1894 2: 668) とさえ述べられている。すなわちハーンは多くの場合，西洋を抑圧的男性性と位置付け，対照的にギリシャや日本を被抑圧的女性性としている。いつか「日本の若い世代 (her younger generation)」は，西洋人が「古代ギリシャ文明 (the old Greek civilization)」にそうするように日本を回顧するだろう (683) とハーンが述べるのも，無理はない。

このように『面影』の日本は，母国ギリシャと同一視されるのみならず，父権制の下で抑圧された女性性を帯びてくる。母国ギリシャが象徴的「母」だとすれば，「子」に該当するハーンが女性的日本を代理母と見立て，一種の母胎回帰願望を投影したと読むことは不可能ではない。彼は《強大な父親》としての西洋に引き戻されることを免れるべく，論理的思考よりも願望や《思考停止》をもって，抑圧された母親としての《辺境の国日本》に，自分が回帰すべき新たな母胎を見出そうとしたということになるだろう。

3. 神仏に見る父権

しかし，ここで注意すべき点が一つある。ハーンは，日本を父権と見立ててもいるのだ。

『面影』の地理的な主題は，出雲とそこに隣接する松江である。「神国は日本の聖名である――神国とは「神々の国」であり，神国でとりわけ最も聖なる地が出雲の国である (SHINKOKU is the sacred name of Japan, — Shinkoku, ‘‘The Country of the Gods;’’ and of all Shinkoku the most holy ground is the land of Izumo)」(Hearn 1894 1: 172)。その傍ら，松江は「日本最古の領の軍事的中

心地だった（Matsue was the military centre of the most ancient province of Japan）」（162）。そのような「神国」に君臨する天皇は，「国民の父（the Father of the people）」であるという（Hearn 1894 2: 391）。

無論これだけをもって，ハーンが日本を通して打ち出した母子関係や女性性が無化されたと見るのは不適当だろう。だが『面影』には，各所で父性や父権が――ときおり肯定的にさえ――描かれているように見える。例えば，「日本人種の父祖たち（the fathers of Japanese race）」として信仰される神々への言及があるように（385），ハーンは常に父権を忌避していた訳ではなかったとも読める。それは「近代」や「力あるもの」を象徴する父権についても同様で，例としては美保関で見た軍艦が挙げられるだろう。この厳めしい「巨人（the colossus）」は「天子様の船（ship of the Tenshi-Sama, the Son of Heaven）」である。ハーンはその光景描写を「今日は新日本を（…）帝国の戦船を見るとする。皆が船を見ようと出かけている（today I shall see those of New Japan［…］an Imperial man-of-war. Everybody is going out to look at her）」と始める。笑い合い歓声を上げる群衆と見物用の幾多の小舟が「船（her）」を見物に取り囲み，船頭が舟歌を歌っている状況は「夢見のように奇妙（[s]trange as a vision of sleep）」だった（Hearn 1894 1: 240）。こうした描写を見るに，ハーンの描く父性は物質的近代（軍備）を象徴する点では典型的だが，同時に神話的過去をも兼ねている。神聖性との重複は，女性性／母性のみならず，男性性／父性にも起きているのである。『面影』で両性は混在している。

女性性を含んだ父性について，ハーンの仏教観から例に取ってみよう。「ホトケサン（Hotoke-San）」は「目の瞳の中（in the pupil in the eye）」に映る顔の像をも意味し，これは各々の人間に宿る「小さな仏陀（lesser Buddha）」にして「霊魂（the Spirit）」である（Hearn 1894 2: 606）。あわせて，仏陀は「世界の父（the Father of the World）」だとハーンは言う（Hearn 1894 1: 338）。歴史上，仏教の開祖となった仏陀は男性だが，本作では随所で日本人全般が仏に同一視されている。例えば，大きな仏像の眼差しは子供を連想させるもので，「東洋の魂（the Soul of the East）」の柔和さと穏やかさを代表し（78），地蔵を拝む少年は「神の双子（the twin brother of the god）」と見紛うほどで，金仏や石仏は「この民族の微笑の説明（the explanation of the smile of the race）」を表しているとされる（Hearn 1894 2: 674）。また，ハーンの引用した地蔵の賛歌には，「地蔵（he）」が「冥土では私はお前の父にして母だ（I am your father and mother in the Meido）」と呼びかける一節がある（Hearn 1894 1: 62）。

これらを踏まえると，《父性》の体現者である天皇の下に《母性》的日本が治められている。そして日本人は《仏》という《父性》を宿しており，しかもその《父性》は《母性》をも内包し得るということになる。ハーンを受容する抑圧された母性／母国としてのギリシャ／日本に，彼は『面影』で男性的・父性的な強さも見出し，場合によってはそれを日本と融合さえしている。これによって日本の父権的強大さが強調されると同時に，女性性／母性としての日本に一種の強大さや権威が付与されているのではないだろうか。それによって母権は強化され，かつ，性差を越えた異質さ

をも帯びることになる。

4.　神仏にして虫である人々――社会進化論の下に

前章に見たハーンの描く《父性》は，通常は対立するはずの母性や女性性をも内包し得る，複雑な表象である。例えば彼は，父権性を体現しているはずの天皇を「女王」になぞらえている。ここで特徴的なのは，それが虫の女王であるということだ。《父》たる天皇を頂点に置いた日本の子供達に関して，ハーンは端的に「子供は生来神道である（The child is born Shinto）」と表現する。その子供達が天皇に向ける忠義は，女王蜂／蟻に対して群れの個体が本能的に向けるものとして描かれているのである。

> Home teaching and school training only give expression to what is innate: they do not plant new seed; they do but quicken the ethical sense transmitted as a trait ancestral. […] Ask a class of Japanese students — young students of fourteen to sixteen — to tell their dearest wishes; and if they have confidence in the questioner, perhaps nine out of ten will answer: ‘‘To die for His Majesty Our Emperor.’’ And the wish soars from the heart pure as any wish for martyrdom ever born. […] Such ecstatic loyalty is a part of the national life; it is in the blood, — inherent as the impulse of the ant to perish for its little republic, — unconscious as the loyalty of bees to their queen. It is Shinto（Hearn 1894 2: 389）.
>
> 家庭の教えと学校教育は生来のものに表現を与えるに過ぎない。新しい種を蒔くのではなく，先祖伝来の形質として伝達された道徳観念を活気づけるのである。（…）どこでもよい，日本人生徒たちの学級に尋ねてみよ――14歳から16歳の若い生徒たちに――最も大切な願いを教えてくれと。尋ねた者を生徒たちが信用していれば，10人中 9 人がこう答えるだろう，「天皇陛下のために死ぬことです」。しかもこの願いは，古来の殉教者の願いすべてのように純粋な心から迸っている。（…）このような忘我の忠義は，国民生活の一部である。これは彼らの血の中にもともと流れているのだ――自分の小さな共和国のために死に果てる蟻の本能的衝動のように。これが無意識的であること，蜜蜂の女王蜂に対する忠義と同じなのである。これが神道だ。

ここで神道は，天皇に対する，先祖から伝わる理屈を超えた「生得の（inherent）」自己犠牲的忠義を教える教義となる。この忠義は，蟻が己の集団のため，蜜蜂が女王蜂のために尽くす本能に等しいとされる。ハーンいわく，キリスト教宣教師に抵抗しうる力を与えてくれるこの忠義の根底にあるのは，親孝行や子供の「従順さ（docility）」，女性の「甘美さ（sweetness）」であり，「保守主義（conservatism）」であり，「根本義のためには何故という思いもなく命を放棄する覚悟（the readiness to surrender life for a principle without a thought of wherefore）」である（388–89）。こ

の日本人の民族的特性は古くから遺伝されており，「確立された封建制（established Feudalism）」よりも昔から民衆の中に存在した（390）とハーンは論じている。

服従や英雄的犠牲をもって，日本人の精神的美点とするハーンの主張は，国家神道を彼が是認していることの証左だろう。だが，それだけではない。彼は，この日本人の精神的美点を，スペンサー的社会進化論に結びつけることで，当時の「科学的」根拠を与えようとさえしているのだ。神道の担い手である日本人を社会性昆虫になぞらえる彼の筆致にも，このスペンサー的思想を見てとることができる。

> How far are these antique beliefs removed from the ideas of the nineteenth century? Certainly not so far that we can afford to smile at them. […] [T]he thought of a child may repeat the conclusions of a Spencer or a Schopenhauer. Are not our ancestors in very truth our *Kami?* Is not every action indeed the work of the Dead who dwell within us? […] Nor can we hastily reject the Shinto thought that all the dead become gods, while we respect the convictions of those strong souls of today who proclaim the divinity of man（393–94）.
>
> こうした古代信仰は19世紀思想からどれほど隔たっているのだろう？　確実に，一笑に付せてしまえるような遠さではない。（…）ある子供の考えが，スペンサー的，ショーペンハウアー的結論をなぞるかもしれない。我々の祖先はまさしく真に神ではないか？　あらゆる行為は我々の内に住まう死者の働きではないか？（…）またわれわれは，全ての死者は神々になるという神道思想を軽率に排することもできまい。なぜならば人間の神性を主張する今日のああいった力強い精神の確信を，われわれは尊重しているではないか。

こうしたハーンの視点では，19世紀のスペンサーやショーペンハウアーの進化哲学は神道と同列であり，神道の古さおよび人間の全ての行動の根拠は，死んだ祖先である「神（Kami）」からの遺伝なのである。ハーンが特に依拠しているのはスペンサーであり，1886年の W. D. オコナー宛て書簡によると，ハーンはスペンサーの著作を読んだことで他のいくつかの理論――「人間の自律性，そしてあの実証的懐疑論（human automatism, and that positive skepticism）」――を捨てたという。彼はスペンサーの哲学を包括的かつ厳密な理論と認識しており，「私が読んだのは，今のところ第一原理だけですが，残りの全ては当然の帰結に過ぎません（I have only read, so far, the First Principles; but all the rest are corollaries only）」（Hearn and Bisland 1906:1 365）と続ける。翌年 E. ビスランド宛ての書簡でも，「『第一原理』は一切の要点を含んでいる（‘‘First Principles’’ contain the digest of all）」（392）と絶賛している。

『第一原理』での虫への言及は，例えば「進化の法則（The Law of Evolution）」の節に見られる。スペンサーによれば進化とは「よりまとまりのない形態から，よりまとまりのある形態への変化（a change from a less coherent form to a more coherent form）」（327）なのだ。そして，それをも

っともよく体現するのが，社会性昆虫なのである。

> Creatures that hunt in packs, or that have sentinels, or that are governed by leaders, form bodies partially united by co-operation. […] [T]he social insects show us assemblages of individuals of a still more consolidated character: some of them having carried the consolidation so far that the individuals cannot exist if separated.（Spencer 315）
> 群れで狩りをする生物や，番兵のいる生物，指導者によって統治されている生物は，協調性によって部分的に結合された一群を形成している。（…）社会性昆虫は，さらに一層統合された個体の集合体という様態を呈している。その一部はあまりに統合されているため，個体が単独では存在できないほどである。

こうした進化の例は，社会的有機体の内に多数見出されるとスペンサーはいう。そして進化がさらに発生するには，例えば，「強い部族による弱い部族の征服（the subjugation of weaker tribes by stronger ones）」が必要である。「進化のあいだには同様に，太陽系でも，惑星でも，有機体でも，国家でも，全集団の進歩的集合化がある（Alike during the evolution of the Solar System, of a planet, of an organism, of a nation, there is progressive aggregation of the entire mass）」（327）。それは「社会的所産（social products）」である科学も同様である（328）。

ハーンはスペンサーらの思想を「現代科学（modern science）」と認識しているが（Hearn 1894 1: 341），何故それが日本宗教と共通し得るのか。少なくともハーンの解釈したスペンサー的進化論は，実証的な思考や合理的方法論というよりは，ある種の世界観・宇宙観であり，故に宗教的哲学とも結びつき得たのだろう。例えばハーンは「文学的夢想家として（as a literary dreamer）」「必要な霊感（the inspiration needed）」をスペンサーや古代ギリシャの学派の夢等から得ているとチェンバレンに伝えている（Hearn and Bisland 1906: 2 235–36）。別の書簡によると自分（ハーン）たちは，インドの非科学的ながらも霊感のある思想家を越えておらず，仏教とスペンサーは「究極者（the Ultimate）」を前に同じ立場を取っているという（Hearn and Bisland 1910: 56）。このようにして，ハーンはスペンサー理論と仏教との同一性を見出す。そして『面影』では，神道は自身を強化するためなら仏教をはじめ「あらゆる形の外来思想（all forms of foreign thought）」を取り込んできたと記している（Hearn 1894 2: 387–88）。ハーンはそうした解釈をもってスペンサー理論・仏教・神道に同一性を見て取り，これが『面影』における日本像に結実したと思われる。

『面影』の《日本》は，天皇が絶対的頂点に君臨する国である。後の天皇制ファシズムにも似た様相を呈しているが，特徴的なのは，社会進化論的思想によって相反する要素が統一されている点である。両性具有的な王権――父なる天皇／《虫の女王》――によって統治される家族国家《日本》は，宗教的・伝統的な家族主義と，社会進化論的・近代的な全体主義とを相互補完的に併せ持っている。それにより，《日本》の血縁的/伝統的な結束の強さと，虫的に――非人間的／超人的に――

進化した優越性とが根拠づけられている。言わば近代性と前近代性とが対立し，人間の在り方が問われる時代に，ハーンは時代や人間性を超えた家族国家を発見しようとしたのである。

5. おわりに

『面影』という紀行文がハーン独特の主観や思想に由来していることは先行研究で指摘されており，本稿ではその点について「母」,「父」,「虫」を基本要素として検討した。その結果,『面影』を中心に散在する描写を踏まえると，次のようにまとめられよう。ハーンが幸福感を覚える母国ギリシャに似た《日本》は，女性的である。その宗教的・軍事的頂点は父性の体現者である天皇だが，《日本》における父性とは，仏のように両性具有的でもある。そして日本人は，天皇への自己犠牲的な宗教的忠義を本能的に持っており，それは《科学》――主にスペンサーの社会進化論――において，蟻や蜜蜂等の虫と同様の本能と説明される。この《日本》では，深い思考や苦悩は必要とされない。虫のように本能的で純粋な日本人は,《虫の女王》/天皇への捨て身の忠義によって，強大な家族国家を成立させている。

換言すれば,『面影』でハーンは神話宗教に象徴されるような前近代性と，西洋思想や近代軍備に見られるような近代性とを，家族主義的な枠組みをもって一つの《日本》という形に統一しようと試みたのではないか。それは，家庭の崩壊と近代西洋文明からの拒絶を経験したハーンが，大日本帝国で強固な家制度を再構築するにあたって必要な演出だったと推察される。そこでは個々の人々や生物は，本能に従う均一的な集団と見なされている。

日本表象が「母」,「父」，そして「虫」を兼ねているのは，一見して奇妙な重複である。日本によって受容されることだけがハーンの目的であれば，自分を受容してくれる母性――回帰すべき《母胎》――を日本に見出しさえすれば十分であっただろうからだ。父性をも見出した理由は，おそらく，ハーンがかつて家庭の崩壊を経験したことに加えて，血の繋がりや《親子》の関係を指す表現を多用している点にある。母性だけでは，家族は成立し得ない。かくして，神々や多様性を受容する「母」と，万世一系的な結束力を誇る「父」とが，共に日本を表象することになる。しかしこれだけでは，彼の日本表象がなぜ「虫」という側面も見せているのかが説明できない。ハーンが絶賛し『面影』でも依拠している，スペンサーの社会進化論をあらためて確認しよう。スペンサーの主著『第一原理』によれば,《進化》とは，よりまとまりのある形態へと化すことであった。だからこそ，高い集団性を獲得した蟻や蜂のような社会性昆虫が，最も《進化》した生物だということになる。そして《進化》は，微小な生物から人間の集団や社会，惑星や宇宙に至るまで発生している。この論を家族関係に当てはめれば，結束力の強い封建的な日本の家制度的家族像は,《進化》した例である。当時19世紀の科学的根拠を援用していたハーンは，自分の生まれ持った家族と正反対の理想像を日本に見たのであろう。

社会進化論の影響もあって,『面影』では部分の説明が全体に，全体のそれが部分にあてはめられており，牽強付会の傾向があるようにも読める。この背景には，ハーンが合理的思考や結論の提

示よりも，矛盾した状態を好んだことが関係しているかもしれない。『詩人論（*On Poets*）』（1934）に収録されたハーンの講義には，ウォルト・ホイットマンの詩に言及し引用した箇所がある。ハーン曰く，ホイットマンの詩とは，この詩人が「進化について読んだことの大ざっぱな表現（rude way of expressing his reading of evolution）」だという。

Do I contradict myself?
Very well, then I contradict myself,
(I am large, I contain multitudes.)[2]
ぼくは矛盾しているのか？
結構，それならぼくは矛盾している，
（ぼくは巨大，ぼくの中に大勢が居る）

矛盾と進化の関係とは何か。ハーンはそれを，人間の「過去との大いなる関わり（enormous relation to the past）」と説明し，ホイットマンの引用を続ける。「ぼくが母から生まれ出る前に幾世代もがぼくを導いた，ぼくの胚子はけっして停滞せず，何もこれを覆い隠せなかった。胚子のために星雲が結集して天球となった。長く，ゆっくりと地層が堆積して胚子の台座となった。巨大な植物が胚子を育んだ。奇怪なトカゲ類が胚子を口に咥えて運び，慎重に据え置いた（Before I was born out of my mother generations guided me, My embryo has never been torpid, nothing could overlay it. For it the nebula cohered to an orb; the long, slow strata piled to rest on it; vast vegetables gave it sustenance; monstrous sauroids transported it in their mouths and deposited it with care.）[3]」。この詩が意味するところは，「人間の本質（[t]he essence of man）」が宇宙と関わる中で，「あらゆる低級の生命形態（all the forms of lower life）」を経由し，ついに現在の形態に発展したことだとハーンは解説する（836）。別の言葉では，「進化哲学（evolutional philosophy）」における「生命の始まり（the beginning of the life）」と呼んでいる（837）。この詩をもとにハーンは個人の多様性と矛盾について，ネオ・プラトニズム的にまとめ上げている。「数百万の人々は，その永遠的本性によって一者である。（…）私たちそれぞれの中に多数の本性がある。一人の人間は単一のものではない。極めて多様なのだ。自分自身に矛盾することはまったく自然である（The millions of men are by their eternal nature One. […] In each of us there are many natures: a man is not single: he is multiple exceedingly. It is but natural that he should contradict himself）」（836）。そして「無限なるものと関わっているために，人間の本質は無限である。それは普遍なるものと関わっているために普遍である（The essence of man is infinite by relation to the infinite; it is universal by relation to

[2] ここでハーンが引用している文章は，ホイットマンの『草の葉（*Leaves of Grass*）』（1855）に収録された「ぼく自身の歌（Song of Myself）」の第51節（78）。
[3] 前掲書，第44節（72）。

the universe)」(837) とも述べている。注目すべきは，矛盾に肯定的価値が与えられている点であろう。これが多義性と統一性とを，同時に意味している。

ハーンの社会進化論的思想において，矛盾とは思考によって解消されるべき問題ではなく，多様な永遠，無限等を示唆する必然である。西洋と日本との狭間で彼が覚えた葛藤も，この思想の中では停止され，代わりに実社会や現実時間から離れた想念——神話や宗教，または宇宙規模の《進化》に関わる想念——が形成されることとなる。このようにしてハーンの矛盾は，母性や父性，人間以外——例えば虫，あるいは神仏との繋がり——を結びつける。そうして結びついた表象の体系は，現実的な不幸を無化するほど深遠に見えるような家制度や組織性を示そうとさえする。

参考文献

・一次資料

Hearn, Lafcadio. *Glimpses of Unfamiliar Japan*. 2 vol. Boston: Houghton Mifflin, 1894.

・二次資料

Spencer, Herbert. *First principles*. 2nd ed. London: Williams & Norgate, 1867.

Hearn, Lafcadio, and Bisland, Elizabeth. *The Japanese Letters of Lafcadio Hearn*. Boston: Houghton Mifflin, 1910.

Hearn, Lafcadio, and Bisland, Elizabeth. *The Life and Letters of Lafcadio Hearn*. 2 vol. Boston: Houghton Mifflin, 1906.

Hearn, Lafcadio, et al. *On Poets*. Tokyo: Hokuseido, 1934.

Stevenson, Elizabeth. *The Grass Lark: A Study of Lafcadio Hearn*. New Brunswick: Transaction, 1999.

Whitman, Walt. *Leaves of Grass*. Philadelphia: David McKay, 1891–1892.

小泉凡『民俗学者小泉八雲：日本時代の活動から』，恒文社，1995.

関田かおる「ハーンの父母像とその変容：自筆草稿を手がかりに」『ユリイカ』，1995，27(4)，201–15.

平川祐弘「ギリシャ人の母は日本研究者ハーンにとって何を意味したか」『国文学：解釈と教材の研究』，1998，43(8)，6–18.

三成清香「ジャポニスム文学への挑戦」『宇都宮大学国際学部研究論集』，2016，41，151–166.